ISSN 1883-7867

Nord-Est

日本フランス語フランス文学会東北支部会報　第８号

目次

【論文】
lui+apporter と y+apporter との対立　p.1、
新田　直穂彦
現代ケベック文学の諸潮流　p.15、
廣松　勲
【追悼】
林修氏を偲んで　p.37、
佐野　敦至
林さんのこと　p.38、
中島　淑恵
Hommage　p.41、
Yan MEVEL
矛盾する人　p、43、
大谷　尚文

編集後記　p.46、
投稿規定　p.47、

日本フランス語フランス文学会 東北支部

2015

lui+apporter と y+apporter との対立

新田直穂彦

1. はじめに

フランス語に於いて、前置詞àに導かれる間接目的補語（OI）が代名詞化されると、与格代名詞（lui, leur）、à+人称代名詞の強勢形（à lui, à elle, à eux, à elles）、中性代名詞（y）のいずれかに置換される[1)]。これらの代名詞の内、lui, yの両者に対して共起可能な動詞について、文法書では、（1）のように人をluiで、（2）のように物をyで受けると説明されている[2)]。apporterもlui, yと共起可能であるが、人対物という基準を適用することはできない。（3）のように物をluiで受けることがあるからだ。

（1）Les citadins estiment que la révolution ne leur［*n'y］a pas apporté grand-chose

（*LMd*, Octobre 1982）

（2）Au cours de l'été 2012, j'ai également adressé ce manuscrit à Natalie. Elle y［??lui］ a apporté quelques corrections.

（Simonet, *Marc Beltra : roman autour d'une disparition*, 2013）

（3）Le lait maternel contient en outre l'intégralité des éléments nutritifs dont le bébé a besoin ; l'idéal est de ne lui［n'y］apporter aucun complément pendant les quatre à six premiers mois de la vie, pas même de l'eau.（*LMd*, Décembre 1997）

人対物という基準が適用できないとすれば、何を基準にして lui, y を使い分けているのだろうか。この疑問の解決を目指し、apporterとOIの代名詞（lui, y）との共起関係について考察してみたいと思う[3)]。

1）間接目的補語（complément d'objet indirect）を OI、直接目的補語（complément d'objet direct）を OD と省略する。例文の lui, y 及びこれらに対応する語句に下線を引く。与格代名詞を三人称に限定する。lui, leur をまとめて lui と表記する。

2）cf. 朝倉（2002 : 293），朝倉（2005 : 237）

Le Monde diplomatique を *LMd* と省略する。Le Monde diplomatique. Les archives du journal. 58 années d'archives:1954-2011（DVD-ROM）

3）à+名詞（句）に対応しない状況補語の y は、考察の対象から外す。

Ces chefs vikings, qui emmenaient familles et clients en Islande, y apportaient une civilisation déjà hautement avancée.（*LMd*, Janvier 1970）

2. apporterの用法

2.1 用法の分類

apporter の用法の分類を行う。下記の用法の内、OI を伴わない他動詞の用法、及び凝結表現は扱わない。支持動詞は他動詞の用法の一種であるが、他動詞とは別の用法として扱う。支持動詞については、**2.2** で説明する。

他動詞（**OI** を伴わない）

（4）La révolution de 1956 avait apporté deux innovations principales.
（*LMd*, Septembre 1965）

（5）La seconde guerre mondiale a apporté des changements spectaculaires, quoique parfois provisoires. （*LMd*, Février 1970）

他動詞（**OI** を伴う）

（6）Les enfants sont contents parce que le Père Noël va bientôt leur［*y］ apporter des jouets. （Schroeder, *Journal d'Occupation : Paris 1940-1944*, 2000）

（7）l'île connaissait la prospérité au temps de l'esclavage, et l'indépendance lui［y］ a apporté la misère （*LMd*, Septembre 1963）

支持動詞

（8）A l'origine, il s'agissait d'acheter du poisson à bon prix aux pêcheurs de Severo-Kurilsk et de leur［*y］ apporter une aide technique en retour.
（*LMd*, Septembre 2001）

（9）Votre livre contribue à cette discussion largement ouverte qui est indispensable à la vie démocratique. Et vous y［?lui］ apportez une contribution très positive
（Mendès-France, *Préparer l'avenir.1963-1973.*, 1989）

凝結表現

（10）Il n'y a qu'une chose intéressante dans la vie, c'est de créer. D'**apporter sa pierre à l'édifice**. （Groult, *Journal à quatre mains*, 1994）

（11）En ce sens Malraux servit de Gaulle et fut desservi par lui. Il lui **apporta beaucoup** et n'en reçut rien.
（Mauriac, *Et comme l'espérance est violente*, 1976）

apporter の原義は「運ぶ」ことである。運ぶものを表す OD が存在しなければ、運ぶ行為は成立しないので、apporter は常に OD を伴う。OD の受け手を表す OI が存在しなくても、与える行為は成立するため、OI を伴わない場合もある。OI を伴う場合、他動詞 apporter は S V OD OI という構文をとる。この構文に於いて、OD は OI へ移動する。移動の結果、OI は OD の所有者になる。(6)を例にとれば、おもちゃ(jouets)が子供たち(enfants)へ移動し、子供たちがおもちゃの所有者になる。

2.2 支持動詞

(12) A cette question ancienne, un historien israélien apporte une réponse nouvelle.

(*LMd*, Août 2008)

(12)' une réponse nouvelle d'un historien israélien à cette question ancienne

述語の意味が形成される際、一般に動詞が重要な役割を果たすが、(12)では動詞よりも寧ろODの影響力が大きい。(12)に於いてapporterは、時制や性数の標示として機能しており、「運ぶ」という原義は弱められている。このように本来の意味を失い、名詞の補助として機能している動詞を支持動詞と呼ぶ[4)]。

支持動詞の判別方法として、前置詞 de を用いて文意を損なうことなく動詞を削除できるか否かを確かめる方法が有効である。削除し得た場合、その動詞が支持動詞である。(12)を例にとると、une réponse nouvelle d'un historien israélien à cette question ancienne と変形しても、変形前と文意は殆ど変わらないので、(12)の apporter は支持動詞であると分かる。

(13) Mais le récent coup d'Etat au Dahomey apporte un élément nouveau.

(*LMd*, Décembre 1972)

(13)' ?un élément nouveau du récent coup d'Etat au Dahomey

(14) Mais le récent coup d'Etat au Dahomey apporte une contribution.

(14)' une contribution du récent coup d'Etat au Dahomey

(13) クーデターが新要素を与える ≠ (13)' クーデターの新要素

4) cf. Gross(1989, 1996a, 1996b)

（14）クーデターが貢献する　　≒（14)' クーデターの貢献

（13）の apporter も支持動詞のように見えるかもしれないが、（13）'の「クーデターの新要素」という意味は、変形前の意味と隔たりがあるため、（13）の apporter は支持動詞ではない。しかし、（13）の OD を une contribution に書き換えた場合は、変形前と文意がほぼ同じになるため、（14）の apporter は支持動詞とみなすことができる。このように支持動詞であるか否かかは、OD により決定される。

3. OI の代名詞化

3.1. 人対物

apporter の構文に於ける lui と y との対立を考察する前に、人と物とがどのように区別されるのかを確認しておこう。朝倉（2002 : 293）は、répondre のような「à qn, à qch のどちらも伴い得る動詞では lui, y で人・物が区別される」と述べているが、人と物とを区別する基準は示していない。人か物かの判断が難しい場合、例えば、動物、組織、国などは、人と物とのどちらに分類されるのだろうか。répondre の構文（S V à+N）を対象にして、人対物の基準を調べてみよう。

人: lui［*y］

（15）C'est ainsi que le médecin répond mimétiquement au patient.（*LMd*, Mars 1999）
　　＞C'est ainsi que le médecin lui［*y］répond mimétiquement.

動物: lui［*y］

（16）Cabotin, le cheval de Crispin hennit. Une jument lui［??y］répond dans un champ de maïs.　（*LMd*, Mars 1978）

組織: lui［*y］

（17）Quand la CIA a ensuite demandé aux décideurs où ils voulaient mettre ces terroristes, on lui［*y］a répondu : c'est votre boulot.　（*LMd*, Avril 2005）

国: lui［*y］

（18）Dans le cas où l'U.R.S.S. met à feu ses fusées moyennes SS-20, on lui［*y］répond par d'autres fusées moyennes, les Pershing-2　（*LMd*, Octobre 1983）

手紙、質問など: **y［*lui, leur］**

（19）Le lendemain matin, il fallait que je réponde à des lettres.（Roy, *Moi je*, 1969）

＞［...］ j'y［*je leur］ réponde.

（20）Plus de 55% des groupes interrogés n'ont pas répondu à cette question.

（*LMd*, Février 1984）

＞Plus de 55% des groupes interrogés n'y［*ne lui］ ont pas répondu.

（21）La formation d'un gouvernement d'union nationale répond à cet objectif.

（*LMd*, Juin 2008）

＞La formation d'un gouvernement d'union nationale y［*lui］ répond.

人を表す語は常にluiで受ける。動物、組織、国もluiで受ける[5)]。手紙（lettres）、質問（question）、目的（objectif）といった語はyで受ける。

lui に代名詞化される語、即ち、人、動物、組織、国に共通している性質は、自ら行動できることである。この性質の有無が lui, y の選択基準だと考えられる。つまり、répondre の構文では、「自ら行動できるもの」が lui に、「自ら行動できないもの」が y に対応する。人対物という基準は、動物、組織、国を閑却して、人と「自ら行動できるもの」とを同一視した基準であると言える。

3.2. 先行研究

先行研究で示された代名詞化の基準が、apporter の構文に適用できるか否かを検証する。

（A）人対物 : lui が人に y が物に対応する

Seelbach（1986）, 朝倉（2002, 2005）, etc.

既に述べた通り、人対物の基準は apporter の構文に適用できない。

（B）個別性 : 個別のものが lui に、範疇が y に対応する

Sandfeld（1965）, Blanche-Benvenist（1978）

5）（18）で l'U.R.S.S.を受ける場合は lui［*y］、ses fusées moyennes SS-20 を受ける場合は y［*leur］になる。

（22）Ce problème, Delamare-Deboutteville venait d'y［*de lui］apporter une première solution.　（Rousseau, *Histoire des techniques et des inventions*, 1967）

個別性の概念が正しければ、指示形容詞のついた OI は、個別のものとして lui に代名詞化される筈である。しかしながら、(22) では指示形容詞のついた OI の代名詞として、y が選択されている。個別性の概念は apporter の構文に適用できないと考えるべきだろう。

（C）自立性：動作による影響を被り、性質や役割などを付与される個体が lui
倉方（1987），西村（1994, 1998）

apporterに関して、西村（1994:130）は、OD/réponse, solution, OI/problème, questionという組み合わせだとyが使用されると指摘している[6)]。

（23）Les trois crises sont inséparables et les réponses à y［*leur］apporter le sont aussi.（*LMd*, Avril 1994）

西村（1994）は、OI を problème, question に限定しているが、(23) が示す通り、別の語でも y に代名詞化され得る。OD についても réponse, solution に限定しているが、OD が contribution, correction などの場合も、y が使用されやすい。注目すべき点は、これらの OD が、apporter と共に支持動詞を形成する OD であるということである。

（D）二次叙述：OI *have* OD という関係が成立するとき、OI は lui に代名詞化される。　Barnes（1980）, Herslund（1988）

Barnes（1980）は二次叙述の関係が成立する明確な条件を示していないので、どのような場合に OI *have* OD という関係が成立するのかを調べる必要がある。

6）西村（1994 : 130）は「話し手の主観によるところが大きい」ことを理由に、lui, y の選択基準を明らかにしていない。

3.3. 代名詞化の基準

支持動詞の概念が lui, y の選択に関与していることが分かった。このことを踏まえて、以下の基準を提案する。

OI が「自ら行動できるもの」を指す場合：lui だけが使用可能

OI が「自ら行動できないもの」を指す場合

支持動詞として機能しない：lui, y 共に使用可能

支持動詞として機能する　：y だけが使用可能

OI が「自ら行動できるもの」を指す場合/支持動詞として機能しない

（24a）Il a apporté des cadeaux à ce peuple.

＞Il lui［*y］a apporté des cadeaux.

（24b）Il a apporté beaucoup d'informations utiles à ce peuple.

＞Il lui［*y］a apporté beaucoup d'informations utiles.

OI が「自ら行動できるもの」を指す場合/支持動詞として機能する

（25a）Il a apporté sa contribution à ce peuple.

＞Il lui［??y］a apporté sa contribution.

（25b）Il a apporté une réponse à ce peuple.

＞Il lui［*y］a apporté une réponse.

OI が「自ら行動できないもの」を指す場合/支持動詞として機能しない

（26a）Il a apporté un élément nouveau à ce projet.

＞Il y［lui］a apporté un élément nouveau.

（26b）Il a apporté un complément à cette question.

＞Il y［lui］a apporté un complément.

OI が「自ら行動できないもの」を指す場合/支持動詞として機能する

（27a）Il a apporté sa contribution à ce projet.

＞Il y［?lui］a apporté sa contribution.

（27b）Il a apporté une réponse à cette question.

＞Il y［?lui］a apporté une réponse.

（24）（25）が示す通り、OI が「自ら行動できるもの」を指す場合、apporter が支持動詞であるか否かを問わず、lui の使用しか認められない。（26）のように、OI が「自ら行動できないもの」を指す場合、apporter が支持動詞でなければ、lui, y 共に使用することができる。（27）のように、支持動詞であれば、y の使用しか認められない。

apporter の構文（S V OD OI）に於いて、apporter が運ぶことを表す場合、OD は OI へ移動し、OI は OD の受け手になる。しかしながら、支持動詞の構文では、運ぶという意味が弱まり、OI を受け手とみなせなくなる。また、「自ら行動できるもの」は能動的に受け手としての役割を担うため、OD の受け手にならない OI は、「自ら行動できないもの」に限定される。以上を整理すると、

OI が「自ら行動できるもの」を指す場合：OI は OD の受け手になる

OI が「自ら行動できないもの」を指す場合

支持動詞として機能しない：OI は OD の受け手になる［ならない］

支持動詞として機能する　：OI は OD の受け手にならない

OI が OD の受け手になる状況と、lui が使用できる状況とは一致する。このことから、apporter の構文では、OI を OD の受け手とみなせるときに lui が、受け手とみなせないときに y が選択されると考えられる。

4. 使用例

S V OD à+N という構文をとる使用例を俎上に載せて、**3.3** で提案した基準の検討を行う。まずは、OI が「自ら行動できるもの」を指す場合を取りあげる。

（28）L'armée soviétique avait aussi apporté la liberté au peuple allemand.

（*LMd*, Mai 1975）

＞L'armée soviétique lui［*y］ avait aussi apporté la liberté.

（29）Le roi, mon maître, a apporté à ce pays l'immobilité et la paix

（Claudel, *Le Soulier de satin*, 1929）

＞Le roi, mon maître, lui［y］ a apporté l'immobilité et la paix

（30）Il est, cependant, un point sur lequel je suis en mesure d'apporter aujourd'hui à l'Assemblée un résultat concret.

（Gaulle, *Discours et messages.1. Pendant la guerre.1940-1946*, 1970）
＞［...］je suis en mesure de lui［d'y］apporter aujourd'hui un résultat concret.

（28）のようにOIが人を表す場合、OIの代名詞としてluiしか選択できない。（29）（30）のようにOIが国や組織である場合は、luiだけでなく、状況補語yの使用も認められる。

（31）Les méthodes physiques ont également apporté beaucoup d'éléments à l'étude des océans.　（*Histoire générale des sciences, sous la dir de R.Taton3*, 1964）
＞Les méthodes physiques lui［y］ont également apporté beaucoup d'éléments.

（32）Un parfum de safran apportait à la rue un air méditerranéen.
（Sabatier, *David et Olivier*, 1985）
＞Un parfum de safran y［lui］apportait un air méditerranéen.

次にOIが「自ら行動できないもの」を指す場合を取りあげる。（31）（32）のapporterは支持動詞ではない。（31）ではluiの他にyも使用可能であるが、容認度はluiの方が高い。（32）ではlui, y共に容認度が高い。

（33）Marx apporta une réponse aux questions que se posait le futur Lénine.
（*LMd*, Mars 1970）
＞Marx y［*leur］apporta une réponse.

（34）La Yougoslavie a, grâce à sa politique fédérale, apporté une solution à son problème des nationalités.　（*LMd*, Janvier 1970）
＞La Yougoslavie y［?lui］a［...］

（35）La politique de la Suède a apporté une contribution essentielle au maintien de cet état d'équilibre.　（*LMd*, Novembre 1971）
＞La politique de la Suède y［*lui］a apporté une contribution essentielle.

（36）Il faut apporter plus d'une correction à ce tableau.

（Reynaud, *Les Syndicats en France*, 1963）

＞Il faut y［?lui］apporter plus d'une correction.

続いて、支持動詞の使用例を扱う。apporter が支持動詞として機能する場合、「自ら行動できないもの」を指す OI は y に代名詞化される。(33) から (36) まで、lui の容認度は y と比べるとかなり低い。

5. コーパス

5.1 検索結果

現代フランス語に於ける apporter と OI の代名詞との共起関係を調べるために、コーパスの検索を行った。コーパスとして、*Le Monde diplomatique*（1954-2011）を収めた DVD-ROM を用いた。

y+apporter		lui+apporter
支持動詞	77	
支持動詞以外	8	
状況補語	22	
計	107	466

検索結果を左図にまとめた。状況補語を除外すると、y+apporter に対する lui+apporter の比率は、y+apporter : lui+apporter＝1 : 5.48 になる。この比率から分かるように、apporter は lui と共起しやすい。

y の使用例 107 の内、OI に相当する y は 85 であった。85 の y はすべて「自ら行動できないもの」に対応していた。lui の使用例 466 の内、支持動詞の構文中で「自ら行動できないもの」に対応していた lui は 29 であった。**3.3** で提案した選択基準に従えば、支持動詞の構文中で「自ら行動できないもの」を lui で受けることはできないため、29 の lui がこの基準に対する反例になる。

5.2. 反例

コーパスで見つかった反例を取りあげる。以下の例文では、「自ら行動できないもの」を指す OI が lui に代名詞化されているが、インフォーマントは y を用いた方が自然であると指摘している。(37) に於ける lui の容認度は非常に低く、(38) (39) (40) では leur の使用が認められない。

（37）<u>Ce problème</u> se pose aujourd'hui à l'échelle mondiale, parce que la Charte

ne lui［n'y］a pas apporté de réponse　（*LMd*, Avril 1987）

（38）Tout cela pose des problèmes difficiles à résoudre, mais, si on n'y réfléchit pas par avance, il sera difficile, le moment venu, de leur［d'y］apporter des solutions possibles et efficaces.　（*LMd*, Juillet 1987）

（39）Il n'en reste pas moins que les règles fondamentales sont demeurées apparemment inchangées, même si on leur［y］a apporté des aménagements techniques dont le principal a été constitué par la création du Fonds monétaire international.　（*LMd*, Octobre 1966）

（40）Mais les sensations douloureuses n'en sont pas moins accusées avec une insistance désespérante et pendant de longs mois. Ordinairement, l'aspirine ne leur［n'y］apporte aucune atténuation.

（Ravault, *Rhumatologie clinique*, 1956）

6. その他の与格動詞

apporter 以外の与格動詞についても触れておこう。ここでは apporter と同じく、OD の移動を表す与格動詞として、fournir, ajouter を取りあげる。

（41a）Vous élaborez à l'école quelque chose qui doit fournir un élément aux besoins religieux des nouvelles générations.　（Barrès, *Mes Cahiers:1911-1912*, 1912）
＞［...］qui doit leur［y］fournir un élément

（41b）Vous élaborez à l'école quelque chose qui doit fournir une réponse aux besoins religieux des nouvelles générations.
＞［...］qui doit y［??leur］fournir une réponse

3.3 で提案した選択基準は、fournirの構文にも適用できる。(41)のOIは「自ら行動できないもの」に相当する。(41a)に於いて、fournirは支持動詞ではないため、leur, yが共に使用可能である。しかし、(41b)に於いて、fournirは支持動詞として機能しているため、yだけが使用可能になる[7)]。

7）(41a)で y の容認度は leur と比較するとかなり低い。

（42a）L'histoire de Simon et de Pandora était déjà surprenante. Les rumeurs réussissaient encore à lui［y］ajouter des détails alléchants et entièrement inventés. （Ormesson, *Tous les hommes sont fous*, 1986）

（42b）L'histoire de Simon et de Pandora était déjà surprenante. Les rumeurs réussissaient encore à y［?lui］ajouter l'authenticité.

3.3 で提案した選択基準は、ajouter の構文には適用できない。（42）に於いて、OI は「自ら行動できないもの」に相当し、ajouter は支持動詞ではない。そのため、**3.3** で提案した選択基準に従えば、（42）では lui, y が共に使用可能になる筈である。ところが、（42b）に於いて、lui の使用は認められない。このように、動詞によって lui, y の選択基準は異なる。

7. おわりに

apporter について述べてきたことをまとめる。コーパスの検索結果によれば、y+apporter に対する lui+apporter の比率は 1 : 5.48 であった。この比率が示すように、apporter は y よりも lui と共起しやすい。apporter の構文に於いて、一般に OI は OD の受け手になり、OI の代名詞として lui が選択される傾向が強い。しかしながら、OI を OD の受け手とみなせないときは、y が使用できる。詳細にいえば、OI が「自ら行動できないもの」を指す場合、apporter が支持動詞として機能していなければ、lui, y 共に使用可能であり、支持動詞として機能していれば、y の使用しか認められない。

本稿では apporter に焦点を絞り、lui と y との対立を考察してきたが、OI の代名詞化の仕組みを解明するためには、他の与格動詞、とりわけ OD の移動を表す与格動詞についても lui, y の選択基準を調べる必要がある。他の与格動詞については、別の機会に取りあげることにしたい。

（東北大学大学院博士課程）

参考文献

Barnes, B. K.（1980）: "The notion of 'dative' in linguistic theory and the grammar of French", *Lingvisticae Investigationes* 4, pp.245-292.

Blanche-Benveniste, C.（1978）: "A propos des traits sémantiques utilisés en syntaxe : critique du trait ＋/－humain", *Cahiers de linguistique* 8, pp.1-15.

Gross, G.（1989）: Les constructions converses du français, *Langue et Culture* 22, Librairie Droz, Genève-Paris.

Gross, G.（1996a）: Prédicats nominaux et compatibilité aspectuelle, *Langages* 121, pp.54-72.

Gross, G.（1996b）: *Les expressions figées en français*, Ophrys.

Herslund, M.（1988）: *Le datif en français*, Éditions Peeters, Louvain-Paris.

Sandfeld, K.（1965）: *Syntaxe du français contemporain* 1 *Les pronoms*, Champion, Paris.

Seelbach, D.（1986）: "A propos de à-datif en français", in Remi-Giraud, S.&M. Le Guern（eds）, *Sur le Verbe*, Presses Universitaires de Lyon, pp.133-169.

朝倉季雄（2002）『新フランス文法事典』、白水社.

朝倉季雄（2005）『フランス文法集成』、白水社.

尾形こづえ（2005）「間接目的 lui と y の対立 ： 動詞 donner の場合」、『フランス語を考える―フランス語学の諸問題Ⅲ』、三修社、pp.60-75.

倉方秀憲（1987）「間接目的語人称代名詞について」、 『ヨーロッパ文学研究』第 34 号、pp.15-36.

西村牧夫（1994）「ものを受ける間接目的人称代名詞 lui」、『西南学院大学フランス語フランス文学論集』第 30 号、pp.107-147.

西村牧夫（1998）「間接補語 y vs à lui vs lui」、『フランス語を考える―フランス語学の諸問題Ⅱ』、三修社、pp.112-122.

【résumé】

lui+apporter vs y+apporter

En français, pour pronominaliser des compléments de structure à+N, on a les trois types de pronoms, le pronom datif *lui*..., à+la forme tonique des pronoms *à lui*..., et le pronom neutre *y*. S'agissant du verbe *apporter*, *lui* est plus dominant que *y* dans le choix de la pronominalisation. Dans le corpus *Le Monde diplomatique 1954-2011*, la proportion de *y+apporter* par rapport à *lui*［*leur*］*+apporter* est de 1 contre 5.48. Le verbe *apporter* entraîne le déplacement du complément d'objet direct. Le complément d'objet indirect joue le rôle du destinataire de ce référent, d'où l'emploi du datif. Mais dans le cas où le verbe *apporter* fonctionne comme verbe support, *y* et *apporter* peuvent apparaître simultanément pour la raison que le sens de destinataire s'affaiblit. Avec le

verbe support *apporter*, ce qui n'agit pas de soi-même（*problème*, *projet*, *question*, par exemple）peut être pronominalisé par *y*.

Il est nécessaire d'approfondir nos recherches sur le choix entre *lui* et *y*. Nous espérons qu'un examen d'autres verbes, qui impliquent le déplacement du complément d'objet direct, pourra mettre en lumière les observations de cet article.

Naohiko Nitta
Étudiant en 4e année
du Cours du doctorat
à Université du Tohoku

現代ケベック文学の諸潮流
移民文学と新郷土文学を中心に

廣松　勲
ihiromatsu@hosei.ac.jp

１．はじめに

2013 年は，ケベック文学、延いてはカナダ文学が世界的な注目を浴びた年であった．まず 2013 年 10 月には，英語系の短編小説作家であるアリス･マンローがカナダ人として初めてノーベル文学賞を受賞し，その 2 か月後の 12 月にはフランス語系のハイチ出身作家ダニー・ラフェリエールがアカデミー・フランセーズの会員に選出されたのである．後者に関していえば，ケベック人・カナダ人・ハイチ人として初めて「不死 immortels」の一員となったことに対して，ケベック社会では喜びの声が聞かれたと同時に、その人物がハイチ系移民であったことへの不満も高まり，選出直後には様々な反応が生じることになった．とはいえ，現代ケベック文学の一翼を担ってきた移民作家がフランスのアカデミーに選出されたこと自体，ケベック文学史において歴史的出来事であったといえる[1]．

このように大きな注目を集めつつあるケベック文学は，これまで幾度かの大きな社会変容を経験する過程で，徐々にその潮流を形作ってきた．それでは，一体どのような社会文化的変容の中から，現代ケベック文学は発生したといえるのだろうか？さらに，そのような社会文化的変容を経て，現在ケベック文学はどのような文学的特徴を有するに至ったのだろうか？本稿ではこれらの問題を論じるために，主に 2 つの文学的潮流に注目する．一つには 1980 年代以降から発展してきた「移動文学 littérature migrante」，もう一つには 2000 年代以降から増加傾向にある「新しい郷土 néo-terroir」を題材にした文学である．

議論の土台として，まずはケベック社会及びケベック文学の大きな

[1] 小倉和子，「ダニー・ラフェリエールのアカデミー・フランセーズ入り」，『ケベック研究』，特別号（小畑精和先生追悼論集）「異文化を紡ぐ文学：間文化主義（アンテルキュルチュラリスム）の可能性」，日本ケベック学会，149-157 頁．

変容を生み出す要因となった，1980 年代前後の社会文化的変容を概説する．その上で，ケベック州における「文学」の社会的役割の変化を検討する．このような考察を念頭に置きながら，より具体的に幾人かの作家を取り上げて，移民文学や新しい郷土文学における特徴的な物語内容や物語形式を明らかにしたい．

２．ケベック文学の歴史概観

1980 年代以降の移民文学や新しい郷土文学の成立に至る経緯を理解するためにも，ここでは大まかに 10 年ごとの区切りを付けた上で，ケベック文学の歴史を振り返っておきたい[2]．

～1930 年代：フランス文学を模倣する文学と郷土文学の時代
1940 年代～：都市文学（モントリオールが中心）と自伝文学の時代
1960 年代～：「静かな革命」とケベック・ナショナリズムの勃興
・フランス系カナダ人文学からケベック文学へ
・先住民文化を扱う文学
1970 年代～：女性や先住民自身による対抗文化の文学の時代
1980 年代～：インターカルチュラリスムとトランスカルチュラリスムの隆盛
移民文学の時代（故郷・起源へのノスタルジーを強調）
1990 年代～：移民文学の時代（出身文化と受け入れ文化の関係性を強調）
ポスト・ケベック文学（「生粋の」ケベック人の新しい視座）
先住民文学のルネッサンス（対抗だけなく共生への関心）
2000 年代～：新しい郷土文学（＝「チェーンソー Tchén’ssâ」派）

現代ケベック文学の重要な社会文化的背景として，何よりもまず重要であるのは，フランス文学からの影響であるといえる．とりわけ，1960 年代のケベック・ナショナリズムの勃興と「ケベック文学」成立の時代を迎えるまでは，パリを中心とした文学界に承認されることが大きな価値を持つ時代が続いた．その後，1970 年代以降のフェミニズ

[2] この大まかな区分に関しては，以下の論考を参照した：Gilles Dupuis, « L’histoire politique de la littérature québécoise », 明治大学・駿河台キャンパでの「ケベック講座」における講演会原稿，2013 年 12 月 11 日．; Clément Moisan et Renate Hidebrand, *Ces étrangers du dedans：une histoire de l’écriture migrante au Québec (1937-1997)*, Éditions Nota bene, coll. « Études », 2001. より包括的なケベック文学の歴史に関しては，以下を参照のこと： Michel Biron *et al.*, *Histoire de la littérature québécoise*, Boréal, coll. « Boréal compact », 2010 (2007 pour l’édition originale).

ムや先住民によるカウンターカルチャーの時代があり，1977 年の「フランス語憲章」を境にして，1980 年代および 1990 年代以降の「新しいケベック人による文学」作品，つまり「移民文学」の時代となる．2000 年代以降は，モントリオールという都市ではなく地方を主題とした「新しい郷土 néo-terroir」の文学と名付けられる文学作品が多く生産され始めた．

ここで，1980 年代以降の状況に焦点を絞ると，この時代以降ケベック文学，延いてはケベック社会には，大きな変容が生じた．すなわち，この時期を迎えると，カナダ・ケベック州への移民が増加するだけでなく，その民族構成がこれまで以上に多様化したのである．1970 年代までのようにヨーロッパ系の移民が多い状況は継続したものの，カリブ海域諸島を含めた南アメリカ，北アフリカ，アジアからの移民が急増した．必ずしもフランス語や英語を母語としない彼らは，フランコフォンでもアングロフォンでもなく，（移民後の人生でいずれの言語を選ぶにせよ）「アロフォン allophone」，または「新しいケベック人 néo-québécois」と呼ばれるようになった．

2000 年代頃は，特に移民が持ち込んだ宗教的慣習が，ケベック社会において様々な論争を生み出すことになった．当然ながら，必ずしも移民や彼らの宗教文化に対する差別的世論だけが問題となったわけではない．むしろ，どのようにしてケベック社会が文化的多様性を受け入れるのかを社会問題として論じる時代となった．この問題を大規模に検討するために創設されたブシャール・テイラー委員会は，2006 年に報告書を公表し，ケベック社会の異文化・他文化に対する姿勢として，ケベック文化の特異性を核とする「間文化主義 interculturalisme」という考え方を提示した．このような他者との共生へ向けた流れと並行するように，ケベック州の文化（特に地方への関心）が改めて高まった時期だといえる．

以上のようなケベック文学の歴史を念頭に置きながら，次に移民文学および新しい郷土文学の発生に直接的に関与したと考えられる社会変容に関して詳しく論じたい．

３．1980 年代前後における社会変容

まず，1980 年代における社会変容を論じるために，本章では主に 2 つの社会文化的出来事に注目して検討しよう．

一つ目に挙げられるのは，1960 年代以降の「静かなる革命」による社会・経済的基盤の改善，そして急速な都市化である．このような社会文化的変容によって，ケベック州に住むフランス系住民たちは，政治・社会・文化の分野において自らの集団を「ネイション」として構築することに取り組み始めた．

文学の分野に限るならば，それまでのように「フランス起源のカナダ文学 littérature canadienne d'origine française」でも「フランス系カナダ文学 littérature canadienne-française」でもなく，「ケベック文学 littérature québécoise」を作り上げることが大きな課題となった．事実、文学領域においてケベック・ナショナリズム運動の先導役であった雑誌「先入観 Parti pris」において，1965 年以降「ケベック文学」という呼称が大いに利用され始めたのである[3]．

二つ目として，以上のようなナショナリズムの勃興には，もう一つ忘れてはならない側面がある．1968 年におけるケベック州「移民省」の設立である[4]．この背景には，フランス語社会の「生き残り survie」という至上命題が存在した．すなわち，それまでの（そして少なからず現代においても），ケベック社会は「フランス的事実 le fait français」と称されるフランス系社会の文化や言語を，英語圏という大海の中で維持しながら生き残ることを最重要課題として認識していたのである．そのような中で設立されたケベック州移民省は，1977 年制定の「フランス語憲章」などの言語法を通じて，フランス語系社会・文化への移民統合に関して中心的役割を演じるようになった．それと同時に，より円滑に移民をケベック社会へと統合するために，移民やマイノリティの文化・言語の保護に関する様々な政策提言も行われてきた．このような社会文化的背景が，1980 年代以降に到来した移民がフランス系

[3] 雑誌「Parti pris」を中心とした文学におけるケベック・ナショナリズム運動を知るためには，以下を参照した：Lise Gauvin, *Parti pris littéraire*, Presses de l'Université de Montréal, 1975 (pour la première édition), 2013 (pour la présente édition).

[4] 古地順一郎，「ケベックにおける移民・文化的マイノリティとその統合政策：政府行動計画実施委員会（1981 年-1984 年）を中心に」，『ケベック研究』，第 4 号，2012 年，日本ケベック学会，72-89 頁．

社会へと統合する過程に存在したのである．

文学の分野に注目するならば，移民作家による作品がケベック文学という文学制度に比較的順調に受容されていった要因は，これら 2 つの社会・文化的背景があったからだと考えられる．とはいえ，1980 年代以降，移民文学がケベック文学という文学野に承認されていく過程は，必ずしも一方的な「同化 assimilation」の強制であったわけではない. 1980 年代頃よりケベック州政府が政策上の基盤に据えてきた間文化主義, すなわち多くの文化･他者の文化との共生に対する姿勢が，ケベック文学と移民文学との関係においても看取しうるのである．

４．1980 年代以降における「ケベック文学」の変容

このような社会文化的変容は，ケベック文学が移民文学を承認するきっかけとなっただけでなく,「文学」という制度自体にも大きな変化をもたらした．ここでは，大まかな時代区分に従いながら，ケベック社会において「文学」制度の社会的役割がどのようなに変化していったのかを検討したい．

まず，1980 年代までは，多かれ少なかれフランス文化の影響を受け入れつつも，ケベック州独自のフランス系文化を表明した上で，ケベック文化を設立することが, その主たる役割の一つであったといえる．すなわち，フランス系文化を核にした「ケベック文学」を打ち立てること，そのために出版社設立や販売経路の拡大のみならず，作品の内容や形式においても「ケベックらしさ」を生み出すことが，主たる目的であったのである[5]．

ところが，1980 年代前後になると，フランス系文化を基盤としない様々な地域からの移民（亡命を含む）が増加したことにより，ケベック社会では所謂「顕在的マイノリティ minorité visible」と呼ばれる人々との共生が，大きな社会問題として認識されるようになった．そのような中,「文学」制度は，新しくケベック社会に参加する移民作家にとって，自らの存在をケベック社会に承認してもらうための一つの手段となった．つまり，彼らは文学作品の制作を介して，自らの「出

[5] 1960 年代以降のケベック社会における文芸出版の状況を知るために, 以下を参照した : Jacques Michon (dir.), *Histoire de l'édition littéraire au Québec au XXe siècle*, Vol. 3, FIDES, 2010.

身文化」と受け入れ地域の「ホスト文化」とを対話・交渉させることで，ケベック社会における自らの立ち位置を測定することになったのである．間文化主義という概念は，このように移民作家たちがケベック文学という制度に完全に同化されたり，それとは逆に周辺化されたりせずに，適度な距離を見つけ出そうとする様子を的確に表す言葉であると考えられる．

その後，1980 年代中頃から 1990 年代以降になると，「移動文学 littérature migrante」や，その文学の特徴として「移動するエクリチュール écriture migrante」といった呼称が普及し始めると，移民作家たちはケベック文学という制度の中で確固たる位置を占めるに至った．この「移動するエクリチュール」という概念は，移民文学の物語的・文体的特徴を指す言葉として，1980 年代中頃に提示された概念である．具体的には，彼らの作品における使用言語，語りの構造，物語の構成といった側面に，移民・亡命者の不安定な帰属状況が表象されていると考える発想である[6]．

このような移民文学の定着の背景には，この時期のケベック州において，（出身文化とホスト文化の双方を含めた）文化を巡る思想に新しい流れが生まれた点も忘れることはできない．それまでのように，主たるフランス系文化を核としながら，境界の明確な複数の文化が対話・交渉の上で共に生きることを想定する「間文化主義 interculturalisme」という立場が，さらにラディカルに推し進められたのである．その結果，（フランス系文化を含む）複数の文化が対話・交渉する過程で融合し，新しい文化（要素）が生まれる過程を重視する「横断文化主義 transculturalisme」という考え方が誕生した．

このような文学制度および文化思想の変容に関して，新しくケベック社会に参入した移民作家が果たした役割は少なくない．次章以降で扱う詩・小説・劇作といった文学作品のみならず，とりわけハイチ系移民を中心に間文化主義を自称した雑誌「漂流 Dérives」（1975-1987），そしてイタリア系移民が中心に横断文化主義を自称した雑誌「逆もまた同様に Vice versa」（1983-1996）は，当時のケベック文化をめぐる

---

6 「移動するエクリチュール」や「横断文化主義」という概念に関しては，以下を参照した：真田桂子，『トランスカルチュラリズムと移動文学』，彩流社，2006 年．

社会的言説を支えていたといっても過言ではない[7].

2000 年代以降となると, ケベック州では, より具体的な政策として, 多文化・異文化との共生を目指す動きが活発になった. その大きな要因として, 移民たちが持ち込んだ宗教文化（特にイスラム教）とホスト地域ケベック州の宗教文化（特にカトリック系キリスト教）との間に, 小規模ながらも多くの衝突が生じたのである. その結果, 2007 年には, フランス系の社会学者ブシャール・テイラーと英系の政治学者チャールズ・テイラーを中心として, 大規模な委員会が設置された. 通称「ブシャール・テイラー委員会」は, フランスのスタジ委員会と同様に, ケベック社会における「非宗教性 laïcité」の実現を一つの主たる議題とした. ただし, スタジ委員会とは異なり, ブシャール・テイラー委員会においては, 文化間の衝突が起こった際の具体的な対処法として,「良識的な妥協 accomodement raisonnable」という方法を作り上げることが、もう一つの中心課題とされたのである.

このような時代背景の中, 現代の文学や大衆文化の領域では, ケベック州の地方の文化, つまり郷土へと関心を向ける作品も多く発表されるようになった. その直接的な要因はまだ明確ではないが, 少なくともその一つとしては, 多文化・異文化への過度の注目から揺り戻しが考えられる. もう一つには, 1960 年代のケベック・ナショナリズムが希求していたカナダからの分離独立がますます非現実的になるに従って, 改めて物語の世界を介してケベック性を追求する傾向が高まったともいえる. この点に関しては, 第 6 章にて詳しく論じる.

本章では, 現代ケベック文学の成立経緯とその基礎となる文化思想の変容を辿ってきた. このような社会文化的背景を念頭におきながら, 続く 2 章では, 幾人かの代表的作家について検討することで具体的に移民文学と新しい郷土文学の実態を解説する.

５．多様な民族・文化・社会的出自の移民作家たち

現代ケベック文学における移民作家の活躍には目を見張るものがあ

---

[7] ケベック文学における間文化主義から横断文化主義への移行に関しては, 以下を参照した：Gilles Dupuis, « De l'interculturel au transculturel：les écritures migrantes au Québec », in *Revue japonaise des études québécoises*, No. 6, AJEQ, 2014, pp. 16-29.；Fulvio Caccia (dir.), *La transculture et* Vice versa, Triptyques, 2010.

るが，必ずしも特定の出身地域（例えばフランス共和国）に限った移民作家だけが問題となるわけではない．例えば，便宜的に出身地域を基準にすると，以下のように，大まかに 6 つの地域によって移民作家を分類することができるだろう．

①ヨーロッパ（特に、イタリア系と東欧からのユダヤ系）
Marco Micone, Fluvio Caccia, Antonio D'Alfonso, Lamberto Tassinari, Philippe Poloni, Régine Robin, Alain Stanké, Robert Gurik, Michel Van Schendel, Alice Parizeau, Monique Bosco, etc.
②カリブ海域諸島（特にハイチ）
Émile Ollivier, Dany Laferrière, Marie-Célie Agnant, Anthony Phelps, Jean Jonassaint, Robert Berrouët-Oriol, Maximilien Laroche, Joël Des Rosiers, Gérard Étienne, Gary Klang, Stanley Péan, etc.
③アジア（中国、日本、韓国、ベトナム）
Ying Chen, Aki Shimazaki, Ook Chung, Kim Thúy, etc.
④中近東（イラク、リビア、レバノン、エジプト）:
Naïm Kattan, Wajdi Mouawad, Pan Bouyoucas, Abla Farhoud, Mona Latif-Ghattas, Anne-Marie Alonzo, etc.
⑤南アメリカ（ブラジル、チリ）
Sergio Kokis, Maruricio Segura, etc.
⑥ロシア、ジョージアなど
Jean Basile, Elena Botchorichvilli, etc.

本章では，このような分類を参考にした上で，特に現代ケベック文学において大きな存在感を有する最初の 3 つの区分に限定して検討することとする．また，移民文学の多様性・異質性を明示するために，ここでは 5 人の代表的作家を取り上げ（上記の一覧では下線部を引いた 5 人の作家），それぞれの作家における特徴的な物語内容や形式を論じたい．

① ヨーロッパ：東欧のユダヤ系移民

まずは，ヨーロッパ系の移民作家は，主にポーランド，オーストリア，ハンガリーといった地域の出身者であり，また多くはユダヤ系移民である．彼らは第 2 次大戦直後にカナダへと移民した人々であり，ケベック社会に適応するために，中には自らの名前をフランス化したり，ケベックにおいて出版社（Alain Stanké < Aloysas-Vytas

Stankevicius）を立ち上げたりする作家も少なからず存在した[8].

彼らの中で，最も注目すべきはレジーヌ・ロバン Régine Robinという作家である．彼女はポーランド系の両親をもち，1939年にパリに生まれた．パリとディジョンの大学にて学位を取得した後，彼女は1977年にケベックに移民し，現在も大学にて教鞭を取っている．彼女は移民文学の揺籃期である 1983 年に小説『ラ・ケベコワット La Québécoite[9]』（言葉遊びで「沈黙させれたケベック人」といった意味合いを含む）を発表し，移民文学の典型的な作家としてケベック文学史に名を刻んだ.また,既に2003年に初来日し,講演を行っている[10].

本作の物語は 3 部で構成され，作者ロバンと同一視できるような語り手・主人公の移民女性が，自らの居場所を求めてモントリオールの英語系地域・フランス語系地域・多文化地域を移り住んでいくというストーリーをもつ．このように「居場所を求めて遍歴する」といったプロットは，移民文学における一つの物語の類型であるといえる．ただし，本作が注目された理由は，このような物語内容からだけではなく，その特異なテクスト形式にもあった．

まず，自身も複数の言語を操るポリグロットであるロバンは，本作においても英語，フランス語，ドイツ語だけでなく，時にはヘブライ文字まで用いることがある．それは，語り手・主人公の移民女性が生きる複言語状況を，テキストの形式として表現しようとした結果であると読み取ることができる．

また，テクストの配置やフォントが多様であると同時に,『ラ・ケベコワット』は幾つものジャンルのテクストが併存する形式を有する．小説・自伝・詩・エッセイが併存するだけでなく，例えばフランス語問題集の一部・看板の文字・警察調書・歴史教科書の一部・ホッケーの試合結果の一覧・電話帳・テレビの番組表といった異質のテクストも現れる．このような形式上の断片性は，山出（2011 年）で指摘したように，ロバンが定住としての「ケベック性」と移住としての「ユダ

---

[8] ヨーロッパ系の移民作家における名前変更に関しては，以下を参照した：Gilles Dupuis, « L'histoire politique de la littérature québécoise » (前掲書).
[9] Régine Robin, *La Québécoite*, Montréal, Typo, 1993 (1983).
[10] 2003 年の来日講演は，以下の雑誌に邦訳が掲載されている：レジーヌ・ロバン,「文学界のどうしようもない単一言語性」(真田桂子訳),『言語文化研究』,第 15 巻・第 3 号，立命館大学国際言語文化研究所，2004 年，97-112 頁.

ヤ性」との間に身を置きながら，自らの移民としてのアイデンティティをテクストに書き込む際の戦略であった[11].

① ヨーロッパ：イタリア系移民

次に，ヨーロッパの中でも，イタリア系の移民作家を検討したい．彼らは1980年代から1990年代のケベック文学において，実作だけでなく理論的側面においても大きな影響力を有した．とりわけ，「横断文化的雑誌」と称された雑誌「Vice versa」において，中心的役割を果たした人物としてマルコ・ミコーネ Marco Miconeが挙げられる．彼は劇作を中心に，移民文学の代表格と見なされる作家である．

ミコーネは 1945 年にイタリア南部に位置するモンテロンゴに生まれ，その後 1958 年，13 歳の時にモントリオールに移民した．自伝的エッセイによると，彼はすでにイタリアにいた頃から，自らの話す地域言葉と学校の標準イタリア語との差異に悩まされ続けていた．その後，まだフランス語憲章が存在していなかったケベック州に移民してからは，今度は英語系の学校とフランス語系の学校を行き来することになった．すなわち，彼は移民でありながらも，ケベック社会における英語とフランス語の軋轢を身を以って体験してきた作家だといえる[12].

彼の作品からは，「何語で話せ Speak What[13]」というパロディ詩を取り上げたい．この詩は 1989 年に発表された当初，やや見当違いな盗作疑惑をかけられたこともあり，大きな反響を呼んだ．その要因となったのは，この詩が 1968 年に発表された女性詩人ミシェル・ラロンドMichèle Lalondeの「白い言語を話せ Speak White[14]」を書き換えだったからである．元々の「Speak White」は，当時社会的エリ

---

[11] 山出裕子，「北米フランス語圏文学の歴史と動向：ケベックの女性文学に関する一考察」，『文芸研究』，明治大学文学部文学科紀要，第 114 号，2011 年，95-118 頁．

[12] Marco Micone, « Écrire et traduire entre deux langues et deux cultures », sur le site de « Molise d'Autore » (http://molisedautore.blogspot.jp/2009/02/testo-originale-di-marco-micone.html：dernière consultation le 14 février 2015), 2009. ; « Apprivoiser Babel », in *Speak What*, VLB éditeur, 2001, pp. 9-12.

[13] Marco Micone, *Speak What*, VLB éditeur, 2001.

[14] Michèle Lalonde, « Speak White » (1968), dans *Change : souverain Québec* (ouvrage collectif), Seghers/Laffont, 1977, pp. 103-104.

ート層を独占していたイギリス系住民による言語的抑圧に対して，フランス系詩人が発した糾弾の詩であった．ここでいう「白い言語を話せ」とは，つまり「アメリカの白い黒んぼ Nègres blancs d'Amérique [15]」とも称されたフランス系住民に対して，フランス語ではなく白人＝英系住民が話す英語を話せということを意味した．ミコーネの「Speak What」では，ラロンドの詩における上記の構図を変容させ，フランス系ケベック人に対する移民作家・アロフォン系作家による呼びかけとして書き換えられた．

そもそもミコーネの詩は，必ずしもフランス系あるいはフランス語系ケベック人による言語的抑圧を糾弾しようとしたのではない．ところが，この点を誤解されたためか，原作者のラロンドなどに盗作であると見なされたことで盗作論争が巻き起こった．しかし，ミコーネが提示したかったのは，むしろケベック社会においてフランス語が置かれてきた状況と，イタリア系のミコーネが話す地域語が置かれてきた状況との間に，アナロジーを認めることであったと考えられる．その上で，ミコーネは「Speak What」を介して，ケベック社会が移民たちの言語により変容したフランス語を承認することを呼びかけたのだといえる [16]．

このように，ヨーロッパ系の移民作家には，1980 年代以降のケベック移民文学の主軸を担う人物が多く存在した．その一方で，同様に誕生直後の移民文学の屋台骨を支えながらも，近年までやや過小評価されがちであった移民作家がいる．それが次に検討することになるハイチ系移民作家である．

② カリブ海域諸島：ハイチ系移民（1）

カリブ海域には数多くの島が存在し，それらの島々は植民地宗主国の言語をそのまま公用語として残している地域が多い．特にマルティニック島とグアドループ島は，フランスの海外県として現在もフラン

---

[15] この言葉は，ピエール・ヴァリエール Pierre Vallières の自伝的エッセイ（1968 年刊）のタイトルとして使われた．本書は，当時のフランス系住民が，自らの置かれている抑圧的状況から，いかにして解放されるのかを論じたものであった．

[16] この「Speak White」は，その後 2012 年に学費値上げに反対する大規模な学生運動が勃発すると，「Speak Red」というタイトルで再び書き換えられた．

ス本国の一部として存在している．このようなカリブ海域諸島の中でも，特にハイチ系移民が多くなったことには大きな理由がある．ハイチ共和国では，1950 年代から 1980 年代にかけて，デュヴァリエ親子の 2 世代に渡る独裁政権が敷かれた結果，知識人・作家を含めて多くの人々が国外に亡命した．そのような中，ハイチから地理的に近いフランス語圏であるモントリオールは，ニューヨーク・フロリダ・パリと並んで，最も多くのハイチ系亡命者たちが移り住んだ場所とされる[17]．イタリア系の作家たちと同じく，彼らは 1980 年代以降のケベック州の言論世界に頻繁に登場しただけでなく，ハイチ文学やケベック文学において，その後の行方を左右する活動を展開した．特に，ジャン・ジョナサン Jean Jonassaintが中心となって 1975 年に刊行された雑誌「Dérives」は，先述したイタリア系雑誌「Vice versa」よりも早くから，間文化主義という文化思想を表明していたとされる．

このようなハイチ系移民作家の中でも代表的作家として検討したいのは，エミール・オリヴィエ Émile Ollivierである．1940 年にハイチの首都ポルトー･プランスに生まれた彼は，青年期にデュヴァリエ（父）政権に反対する学生運動に加わったために投獄された経験があった．その後，短期間ではあるがパリ大学で哲学を学んだ後，1965 年にケベック州北部のアビティビに移民し，1968 年にはモントリオールに移住した．モントリオール大学において成人教育の学位を取得してから，彼は社会学部において教育学を教えつつ，小説やエッセイを発表し続けた．日本には 1999 年と 2002 年に来日し，2 度目に来日した年の 11 月に亡くなった[18]．

彼の小説作品の大きな特徴は，祖国ハイチへのノスタルジーとの対峙である．生前に，幼年期を扱った自伝以外に 5 冊の小説を発表しているが，いずれの作品においても移民，または亡命者のメランコリーともいえる状況を執拗に描写し続けた．例えば，3 作目の小説『パッ

---

[17] Kunio Tsunekawa, « Une étude sur la communauté haïtienne au Canada », in *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, No. 34, 2002, 一橋大学, pp. 1-14.

[18] Lise Gauvin (dir.), *Émile Ollivier : un destin exemplaire*, Mémoire d'encrier, 2012.；エミール・オリヴィエ，「未来にためされる根下ろしと移動」（恒川邦夫訳），『文化的アイデンティティの行方：国際シンポジウムの記録』，彩流社，2004 年，25-38 頁．

サージュ Passages[19]』において，モントリオールとハイチという異なる環境に住む 2 人の主人公は，いずれも何かを喪失してしまったという感覚に苛まれ続ける．物語としては，ハイチとモントリオールを舞台とする 2 部構成の物語が，最終的にマイアミを舞台とする 1 つの物語に収斂する構成を取っている．ハイチの圧政を逃れてマイアミ向けのボートに乗り込むアメデ・オザンジュ，モントリオールの抑鬱的な環境に耐えきれずマイアミに逃げ出そうとするノルマン・マラヴィ，彼ら 2 人の主人公は結局喪失感を満たされぬままにマイアミで死を迎えるという，やや悲劇的な結末を迎える．

この作品のみならず，オリヴィエの小説では，移民や亡命によって故郷や出身文化を喪失するという状況がメランコリー（やその解決の試み）といったテーマの下に描かれる．ところが，彼のエッセイでは，むしろ移民や亡命によってアイデンティティが不安定になることによって，知的な自由が獲得できるとも述べられており，単純に過去主義や悲観主義の作家であるとは言えない複雑さを含んでいる[20]．

② カリブ海域諸島：ハイチ系移民（2）

次に，オリヴィエと対照的な存在として検討したいのは，一回り世代の若いダニー・ラフェリエール Dany Laferrière である．2013 年 12 月にアカデミー・フランセーズの会員となった彼は，1953 年にオリヴィエと同じくハイチ共和国の首都のポルトー・プランスに生まれ，その後祖母の手に預けられ，南西部のプティ・ゴアーヴで幼少期を過ごした．デュヴァリエ（息子）政権の下，青年期にジャーナリストとして活躍する中で身の危険を感じたことをきっかけとして，1976 年にモントリオールに移民した．移住後は，工場労働を含めた幾つもの職業に従事していたが，その中でもジャーナリストや天気予報アナウンサーとしての活躍を通して，メディアの活用方法を学んだ．1980 年代中頃に作家活動を始めてからも，彼は巧みにメディアを利用しながら，興味深い作品群を発表し続けている．

---

[19] Émile Ollivier, *Passages*, Typo, 2002 (1991).

[20] オリヴィエの小説作品に関しては，以下の拙論を参照した：Isao HIROMATSU, *Mélancolie postcoloniale：relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier*, thèse présenté à l'Université de Montréal, 2012 ().

彼の処女作は，1985 年に出版された『ニグロと疲れないでセックスする方法 Commen faire l'amour avec un Nègre sans se fatiguer [21]』というセンセーショナルなタイトルを持つ小説であり，1989 年にはケベック州において映画化もされた．また 2008 年には，小説『私は日本人作家である Je suis un écrivain japonais [22]』を出版し，その後 2011 年に初来日を果たした．邦訳書の数から見れば、現在の所、最も多く日本に紹介されているケベック文学の作家である．

さて，このような経歴を持つラフェリエールの作品がオリヴィエと対照的であるのは，ラフェリエールが必ずしも亡命または移民をトラウマとして描かない点にある．彼の代表作であり，メディシス賞授賞作である『帰還の謎 L'Énigme du retour [23]』においては，ラフェリエールと思しき語り手・主人公が父の死を知らせを受けて，ハイチに帰還する様子が描かれる．確かに，一見すると，本作でもハイチという土地はノスタルジーの対象として描かれる．しかしながら，オリヴィエの小説の様に，回帰してやまない負の記憶と結びついているわけではない．むしろ現在における自分自身の姿，そして現在のハイチやモントリオールの姿を記述するために，必要な限りにおいて故郷や過去が引き合いに出されることになる [24]．

彼の文体や物語構成は非常に簡潔であることが多く，メディアへの露出の多さも相まって，ケベック州の文学界ではやや軽薄な大衆作家と見なされがちである．とはいえ，このような文体・内容上の軽さの底には、文化的（時に人種的）ステレオタイプと戯れながら、それらが引き起こす社会的問題を執拗に問い続ける姿勢が存在するのである．

以上のように，ハイチ系移民作家はイタリア系と並んで 1970 年代

---

[21] ダニー・ラフェリエール，『ニグロと疲れないでセックスする方法』（立花英裕訳），藤原書店，2012 年．

[22] ダニー・ラフェリエール，『吾輩は日本作家である』（立花英裕訳），藤原書店，2014 年．

[23] ダニー・ラフェリエール，『帰還の謎』（小倉和子訳），藤原書店，2011 年．本書はモントリオールへの「到着」を扱った以下の小説と対を成している：『甘い漂流』（小倉和子訳），藤原書店，2014 年．

[24] ハイチ系移民作家における亡命や過去との関係については，以下の書評を参照のこと：廣松勲，「書評：ダニー・ラフェリエール著『帰還の謎』・『ハイチ震災日記：私のまわりですべてが揺れる』」，『ケベック研究』，第 4 号，日本ケベック学会，126-131 頁．

から活躍してはいたものの，正当な評価という面に関しては 1990 年代を待たなくてはならなかった．ヨーロッパ系からその他の地域へと作家の出身地域が拡大していくとともに，ケベック移民文学はさらにその多様性と異質性を増加させていくことになった．

③ アジア：中国系移民

1990 年代以降のケベック移民文学において注目すべきは，それまでの年代とは異なり，アジア系の移民作家も輩出されるようになったという点である．例えば，中国系のイン・チェン，日本系のアキ・シマザキ，韓国系のウーク・チョング，そしてベトナム系のキム・テュイなどが挙げられる．このような所謂「新移民」とも呼ばれる作家の中でも，現代の移民文学における一つの典型例として，ここでは中国系作家イン・チェン Ying Chen を取り上げておこう．

イン・チェンは，1961 年に上海に生まれ，1989 年にモントリオールのマギル大学（英語系）に留学するため，ケベック州に移民した．1992 年に最初の小説『水の思い出 La mémoire de l'eau』をモントリオールにおいて出版したが，その後ケベック州南東部のマゴグに移住し，さらに第 6 作が出版された 2003 年にはカナダ西部のヴァンクーヴァーに移住している．

彼女の作品において特徴的に見られるのは，特に 1990 年代以降の移民作家が言及するようになった，「移民作家」という名付け方の拒絶である．先ほど触れたダニー・ラフェリエールと同じく，チェン自身も「作家」という肩書に，「移民」や「新ケベック人」といった何らかの民族的・文化的な修飾語句が付くことを極端に嫌う傾向があるのである．

このような考え方は，小説作品の物語にも読み取ることができる．例えば，最初の 3 作品は，中国やケベック，そしてパリを物語の主たる舞台として，個人名を伴った登場人物たちが考える，移民と祖国との関係やパリへの憧憬などが描かれていた．この点は，これまでの移民作家と同様，地域が異なるとはいえ，近似したテーマに沿っていたといえる．ところが，第 4 作目の小説『不動のもの Immobile[25]』以

[25] Ying Chen, *Immobile*, Boréal, 1998.

降は，物語の舞台となる時空間が明確に特定されず，また登場人物たちの名前もイニシャルだけになった．このような手法は，2013 年に刊行された最新作『岸辺は遠くにある La rive est loin[26]』においても継続的に活用された．或る意味で，このような文体の「脱民族化・脱個性化」は，バルトの謂う「白いエクリチュール」を想起するまでもなく，チェンによるケベックの文学制度による分類・ゲットー化への異議申し立てであると読み取り得るかもしれない[27].

さて，本章では地域ごとに幾人かの移民作家を取り上げた上で，実際の作品において，いかなるテーマや物語形式がとられてきたのかを概説してきた．ラフェリエールやチェンの様に「移民」といった呼称が拒絶される傾向も存在する．とはいえ，彼らの作品を読み進めてみると，亡命・移民のトラウマ，故郷・過去へのノスタルジー，ケベック社会というホスト文化との距離取り，定住と移住の狭間における居場所の探究といった，共通項となるテーマが読み取りうることは疑いの余地がない．移民文学を読む者は，このような共通性と特殊性の狭間を行き来しながら，所謂「異文化接触（または異文化コミュニケーション)」に関する各作家の考え方を読み取ることになるのである．

ここまでは，現代ケベック文学における一つの潮流として移民文学を中心に検討してきた．現在においてもこの流れは必ずしも縮小したわけではない．とはいえ，2000 年代を過ぎると，このような移民作家の活躍がケベック文学の中で定着すると同時に，もう一つ別の傾向が現れ始めた．それが「新しい郷土 néo-terroir」という言葉で称される作品群である．この潮流は文学分野だけの現象ではなく，ほかの芸術分野においても観察できるものである．そこで次章では，この新しい伝統回帰の潮流が発生した要因を検討するため，幾人かの作家とアー

---

[26] Ying Chen, *La rive est loin*, Boréal, 2013.

[27] 民族文化的な特性に対する移民作家の対応に関しては，以下の論文を参照した：真田桂子，前掲書；Gilles Dupuis, « La littérature migrante est-elle universelle ? », in *Croisements*, No. 1, 2011, pp. 23-33.；Véronique Bonnet, « Nommer les autres ?： quelques catégories et mots utilisés par les critiques québécois pour désigner les écrivains venus d'ailleurs. », in *Itinéraires et contacts de cultures*, L'Harmattan et Université Paris 13, No. 27, 1, septembre 1999, pp. 15-25 (Sur le site de Limag：http://www.limag.refer.org/new/index.php?inc=iframe&file=Textes/Iti27/Bonnet.htm：dernière consultation le 14 février 2015).

ティストを取り上げながら，その社会文化的背景を論じたい．

６．「新しい郷土 néo-terroir」文学の勃興

ケベック文学史を振り返ってみると，1930 年代頃までの文学作品は，カナダの自然と対峙する登場人物を描いた「郷土文学 littérature du terroir」と呼ばれる作品が多く存在した．それらの物語の大半は都市部ではなく「郷土/地方 terroir」にその中心舞台を据えていた．概略的に述べるならば，過酷な自然環境と対峙する中で，主人公が自らの居場所を創り出していくという過程が多くの作品で採用されていた．その後，1940 年代以降になると，ガブリエル・ロワ Gabrielle Roy の作品を代表とするような,「地方」から「都市(特にモントリオール)」へと中心舞台を移動させた「都市文学」へと変貌した．このような都市部を舞台とした物語への変貌は，必ずしも都市だけが物語の舞台となったということを意味するわけではない．そうではなく，地方から都市部への「脱出 exode rural」，そして都市への幻想と現実を描く物語も，一つの典型的な物語内容であった．

この都市＝モントリオールという物語装置は，移民文学も含めて，現在まで継続的に使用されてきた．例えば，近年までのケベック文学の都市と地方の関係は，次のような物語内容に要約することができるだろう．まず，主人公や語り手は都市部，特にモントリオールに生活拠点を置いている人物とされる．次に，モントリオールから外部に出たとしても，つねに都市がその活動拠点・中心に据えられていた．他方で，地方という空間は，ある意味で観光客が期待するような「エキゾティスム exotisme」の対象になりがちであった．このような都市文学としてのケベック文学の代表格には，時に「ジュアル joual」とも呼ばれるケベックの大衆フランス語を多用したミシェル・トランブレイ Michel Tremblay が挙げられる．

ところが，このような都市を中心とした物語からは離れ，改めてケベック州の地方に物語の舞台を置く作品が，2000 年代以降になると多くなってきた．確かに，実際には作者自身はモントリオール近郊に居住している場合が多いものの，しかし最近のケベック文学では物語舞台が徐々に「脱モントリオール化 démontréalisation」（Samuel

Achibald[28]）されていく過程が観察できるのである．

特に，2012 年には，文学雑誌「Liberté」において，このような文学における地方回帰の現象に「新しい地域主義 néorégionalisme」や「新しい郷土 néo-terroir」といった用語が与えられたことで，一つの潮流が生じたといえる．このようなブームを皮肉るように，モントリオール大学教員であるブノワ・ムランソン Benoît Melançonは，地方回帰の傾向にある作家を「チェーンソー派 École de Tchén'ssâ」と名付けるに至った[29]．なぜ「チェーンソー」という言葉が選択されたのだろうか？その理由は，森林において木を切る際，現在は斧や手挽き鋸ではなく電動チェーンソーを使用するという時代の推移を，近年のケベック文学における地方回帰の傾向に重ね合わせたためである．さらに，ムランソン曰く，ホラー映画の傑作『テキサス・チェーンソー』に見られるように，「チェーンソー」という言葉は，ステレオタイプとして「地方」という空間が有する「得体の知れない・未知・不知の領域」という意味合いをも含意する言葉なのである．

① 地方・伝統への回帰

このような新しい流れの中で，現在最も注目される作家の一人が，ガブリエル・アンクティル Gabriel Anctilである．彼は 1979 年にモントリオールに生まれ，その後，ケベック州の地方であるバ・サン・ローラン地方に移住した．現在もその地で生活しながら作家活動を続ける彼は，現在の所，処女小説『国道 132 号にて Sur la 132』しか刊行していないが，本作に関しては既に多くの書評や論文が存在する[30]．本作では，語り手・主人公のテオが作者と同じように都市から地方へと移住することで，ケベック州の過去と自らのそれとのつながりを見出していく様が描かれる．先ほどまで論じていた移民作家の作品にお

---

[28] Samuel Archibald, « Le néoterroir et moi », in *Liberté*, Vol. 53, No. 3, 2012, pp. 16-26 (p. 17).

[29] 「チェーンソー」の綴りは，ケベックのフランス語における音韻に沿った形で表記されている．

[30] アンクティルの小説に関しては，以下の論文が包括的かつ詳細に論じている：Francis Langevin, « La régionalité dans les fictions québécoises d'aujourd'hui：l'exemple de Sur la 132 de Gabriel Anctil », in *Temps zéro*, No 6, avril 2013 (http://tempszero.contemporain.info/document936：dernière consultation le 14 février 2015)

いて「故郷・過去への帰還」が大きなテーマだったとするならば，アンクティルの作品では「地方・伝統への帰還」が大きなテーマとして存在するといえる．さらに，このような物語内容に加え，アンクティルの作品では，登場人物たちの対話が大きな部分を占めており，その結果，口承性や地域の言葉が頻繁に用いられる点にも特徴がある．将来を嘱望される作家でもあり，2015 年 2 月に刊行予定の『嵐 La tempête』にも注目が集まっている．

「チェーンソー派」の一員としては（作家が自称しているわけではないが），アンクティルと近似したテーマと文体において，地方回帰を物語化する若い世代の作家が挙げられる．例えば，いずれも 1970 年代生まれのサミュエル・アルシボルド Samuel Archibald（1978 年-）やニコラ・ディクネール Nicolas Dickner（1972 年-）の小説は，このような潮流の中にあるといえるであろう．

現代ケベック文学におけるこの新しい潮流の価値を理解するためには，1930 年代の「郷土文学」に属する作品群との比較分析を行いながら，慎重にその特異性を見極める必要があるだろう．ケベック州における文芸研究の世界においても，現在進行形でそのような作業が進んでいる状況である[31]．将来的に，この流れが一過性のブームではなく，何らかの思想として昇華されるかどうかは，実作と批評双方の領域における今後の動静を見守る必要があるであろう．

② その他の芸術分野における地方回帰

このような文学分野における変化は，より広い芸術分野においても観察することができる．2000 年代に入ってから，ケベック州の大衆文化における「伝統」回帰という状況である．音楽の世界では，2005 年前後からメ・ザイウー Mes aïeux というバンドを代表として，「ネオ・トラッド＝新しい伝統音楽」と呼ばれる音楽ジャンルが流行した．彼らは，ケベック州のフォークロアを題材とした楽曲・歌詞を作りながら，若者を中心に絶大な人気を誇った．特に，3 枚目のアルバムに収録された代表曲「退化 Dégénération」では，先祖とのつながりを懐

[31] 前述の雑誌「Liberté」以外では，以下の雑誌における特集号も存在する：*Spirale*, No. 250 (Dossier： territoires imaginaires), Spirale magazine culturel inc., octobre 2014.

古的に歌いながら，現代ケベックの若者が置かれた閉塞感を巧みに描き出した．

さらに，言語芸術の分野では，口承芸術の再評価が大いになされるようになった．とりわけ，その立役者となったフレッド・ペルラン Fred Pellerin という若い語り部は，ケベック州モーリシー地方に存在するサン・テリー・カクストン在住である．彼もまた 2005 年前後から，ケベック州やフランスにおける様々なメディアに取り上げられ，また語りのライブも大きな動員数を誇っている．彼の物語は，つねに祖母からの言い伝えや村の伝承として語り始められる．とはいえ，彼が語っていく地域に密着した出来事や土地の記憶は，独特の地域表現・発音を介して，幻想的な物語世界へと置き換えられる．ほとんどの登場人物は，人口 2000 人程度のサン・テリー・カクストンに実在したとされる人物であるが，彼らの個人性はペルランの語りの技法を通じて，ある種の普遍性を獲得した類型的人物へと変貌していく．このような個別性・特異性の追求が類型性・普遍性へと辿り着くことで聴者・読者の関心を捉えるという現象は，文学分野における地方・伝統回帰の潮流にも見られる現象であるといえる．

さて，以上のような，文学を含めたケベック州の現代芸術における「地方・伝統回帰」の根底にどのような社会文化的要因があるのかについて，現段階で包括的な解答を見出すことは容易ではない．とはいえ，少なくともその一つの要因として，1970 年代以降の大量かつ多様な移民の流入によって，フランス系・白人・ケベック人たちがケベック社会における自分たちのアイデンティティや居場所を改めて見つめ直し始めたということは挙げられるだろう．大きな社会変容によって生まれた不安定な自分の居場所を，どうにか自分たちで探し当てようとするため，ケベック社会では「起源」という概念にも近似するような「地方」や「伝統」といった言葉に惹かれることになったと考えられる．

これに加えて，所謂「生粋の」ケベック人，つまり何世代もの間フランス系・イギリス系の祖先を保ってきた（と自認する）人々は，特に 1970 年代以降の移民たちが遭遇したような不安定な居場所・アイデンティティを，今現在，別の形で体験しているのだとも考えうる．

このような地方・伝統回帰の現象が今後いかなる文学作品として結実するのか，そしてその文学領域の変容とともに移民作家・ケベック人作家がいかに呼応するのか．これらの問題に返答するためには，社会文化的背景を視野に入れながら，文学作品を共時的かつ通時的観点から精緻に読み解く姿勢がこれまで以上に要求されるであろう．

７．おわりに

本稿では，現代ケベック文学の主な潮流を，「移民文学」と「新しい郷土文学」という 2 つの視点から概観してきた．これらの歴史的検討から理解されるのは，ケベック文学という文学制度がフランス文学や日本文学といった大きなそれと比べて，社会文化的変容により柔軟性が高いという点である．確かに，出版数も作家数も必ずしも多くないことに鑑みても，結果的にとはいえ，一部の知識人による言説がケベック文学全体の流れのように見えてしまう傾向は否定できない．とはいえ，そのように狭い領域の社会文化的変容に敏感であることによって，ケベック文学は特異性と普遍性，地域性と世界性との間で生じる齟齬を，その時代の傾向に照らし合わせながら絶えず問いなおし続けることができたともいえる．このような脆弱故に敏感ともいえる思考様式が，他のフランス語圏地域の文学においても観察しうるものであるのか，この点に関しては今後の研究課題としたい．

（法政大学国際文化学部専任講師）

【Résumé】

Quelques courants de la littérature québécoise contemporaine
- la littérature migrante et la littérature du néoterroir -

Isao HIROMATSU
ihiromatsu@hosei.ac.jp

L'année 2013 était celle où les littératures canadienne et québécoise ont attiré l'attention particulière du public francophone : Alice Munro a obtenu le prix Nobel en même temps que Dany Laferrière a été élu à l'Académie française. Dans la société québécoise, une telle reconnaissance de sa littérature en France serait aussi bien accueillie que critiquée pour une même raison : le premier académicien « québécois » est un écrivain d'origine haïtienne, Dany Laferrière !

Comme dans d'autres régions francophones, le champ littéraire au Québec se construit ainsi sous l'empire de la littérature française, et une telle situation socioculturelle se perpétue toujours à l'époque actuelle. Toutefois, la mutation sociopolitique et démographique, opérée depuis la Révolution tranquille, a permis à la littérature québécoise de se distancier de la littérature française, ce qui lui a permis de générer enfin divers courants littéraires. Parmi d'autres, la « littérature migrante » et la « littérature du néoterroir » sont autant de courants qui caractérisent la littérature contemporaine au Québec.

Dans une telle optique, le présent article a pour objectif d'élucider le contexte socioculturel de ces courants littéraires à travers la présentation d'écrivain(e)s représentatif(ve)s. Dans les quatre premiers chapitres, nous analysons le changement fonctionnel du champ littéraire qui résulte de la mutation socioculturelle, tout en retraçant l'histoire du Québec moderne. Cela nous permet de mieux comprendre le contexte de l'émergence des courants littéraires en question. Les deux derniers chapitres introduisent huit écrivain(e)s et artistes afin de mettre en filigrane les points de divergence et de convergence entre ceux qui appartiennent au même courant littéraire. Par l'entremise de ces analyses socioculturelles de la littérature québécoise, nous pouvons entrevoir comme l'un de ses traits dintinctifs une vulnérabilité qui n'est autre qu'une sensibilité à fleur de peau envers les problèmes sociopolitiques.

林修氏を偲んで

修くんのこと

佐野敦至（福島大学）

僚友の修くんが突如この世から姿を消してしまった。これほど予期せぬ出来事は一生のうちにそう何度も経験するものではない。

今年度は福島大学が支部大会の主催校である。プログラムがちょっと寂しかったので、修くんに一つ発表を頼んだ。「まあ、いいですけどぉ」といつもの調子で引き受けてくれた。

2014 年 10 月 21 日夕刻。

2 週間前になろうかというタイミングで案内を印刷し、あとは発送するだけとなったとき、携帯が鳴った。事務職員の方からだった。「林修先生なんですが…。救急車で病院に搬送されまして…。死亡が確認されました。」途中、随分と間があったので、あれこれ想像をめぐらせながら続きを待ったが、最後の言葉はまったく予想の範囲外だった。訳がわからなかった。昼休みにはいつもの姿で歩いていたのに。

何の前触れもなく自宅で急に苦しくなり、自ら救急車を呼んだものの、その電話の途中で息絶えたということのようだ。

修くんとは 16 年間の付き合いだったわけだが、関心や生活スタイルの違いからお互いプライベートはまったく知らなかった。しかし仲が悪かったわけではない。仕事のパートナーとしては、少なくとも私は満足していた。修くんと表現することで、感じ取ってもらえるだろうか。学生の間には熱烈なファンがいて、修ちゃんと呼ばれ、慕われていたことも後で知った。

プログラムは発送前でまだ手元にあり修正することは可能だったのだが、予定された彼の発表を削除して作り直すことなど私の心が許さなかった。そのままにし、彼の時間枠で彼について知る人たちに語ってもらうことにした。以下、それを収録する。

林修氏への Hommage である。

林さんのこと

中島　淑恵

この原稿を書いているのは 2015 年 1 月。恐ろしい勢いで時間が経つ。忘れない忘れまいと思ったこともどんどん後ろに過ぎ去って行く。しかしだからこそ、書いて残しておかなければならないこともあるだろう。そう思ってごく個人的な思い出をここに記しておくことにする。私たちが生きてきた軌跡として…。

林さんと私は、今まで目立った形で共同研究など一緒に仕事をしてきたわけではない。研究領域も 20 世紀小説と 19 世紀韻文という、まったく異なる領域で、学会の時などにもいつもつるんでいた訳ではない。それゆえ、故人となってからいかにも親しかったかのようにしゃしゃり出てくるのは本来私の趣味ではない。けれど、なぜか昨今、私の周りの友人や同僚が年若くして亡くなるということが何度もあり、そのたびに思ったことがある。死んだ本人はともかく残された人間にとって、その死は語ることでしか乗り越えられない、というより、語ることによってその死を納得する以外に、私たちはその喪失をいかんともし難いということである。書くということは単なる自己満足にしかならないのかも知れない。けれど敢えて、私から見た林さんについてここに書いておきたいと思う。

1981 年 4 月に私は東京外国語大学に入学した。林さんは 1 年先輩だった。前衛的なファッションを颯爽と着こなす林さんの姿は皆の脳裏に焼き付いていると思うが、そんな「林スタイル」は私が林さんに出会った時には既に出来上がっていた。その頃はその意味をあまり深く考えず、そんなことは当たり前のことだと思っていた。けれど今思えば、田舎から出て来た二十前の少年が、すでにあのスタイルであったということは、驚くべきことだったのではないだろうか。もちろん当時彼が身につけていたものは、高価なものでもブランド品でもなく、大学生が身につけているごく普通のものばかりだったはずなのだが、色は徹頭徹尾黒か白、自分の気に入ったデザインのものを厳選して身につける、というある種の哲学というか美学を貫いていて、男子国立大生にありがちな、その辺にあるものを適当に着て出てくる、というようなことは全くなかったと記憶している。

とはいえ、当時の外大のフランス語学科は、一学年 60 人もいる大所帯で、学年が違うとほとんど付き合いもなく、「そういう人がいるなあ」という程度の認識しか私にはなかった。林さんと親しく付き合うようになったのは、私の学年が上がって、生意気にも大学院生が参加しているようなゼミに時々顔を出すようになってからである。

ところで、私自身はあまり深く進路について考えず、外大のフランス語学科に進学した。親からは、経済的な理由で「国立大学にしかやれない」「下宿はさせられない」という条件を付けられ、高校時代の恩師が外大の出身で、何となく高校に入った時から「お前は外大」と謎の独断的な進路指導を受けたのが大きな原因である。フランス語学科を選んだのも、いまでこそ「子どもの頃からアルセーヌ・ルパンとベルサイユのばらが好きでした」とも

っともらしい志望動機を公式発表しているが、実はそれほど深い意図があったわけではなく、高校時代の世界史の授業でなにしろフランス革命が面白かったのと、英語は結構できる自信があったので、生意気にももう一つ別の言語をマスターしよう、などと野望を抱いたためでもある。自宅から弁当を持って定期券でそのまま受験できるような大学に進学したため、ハングリー精神は皆無、化粧もせず、服装も高校生の延長で、自分で考えて一定の美学に基づいて自らを装うなどということとは無縁の女子大生だった。

そして、私は大学に入学してすぐに幻滅した。外大は私の思い描いていたような大学ではなかったからである。簡単に言えば、女子学生の派手さと男子学生の元気のなさに私は呆れたのだ。当時は田丸美寿々や頼近美津子が活躍している時代で、外大は「女東大」と呼ばれ、女子は比較的裕福な家庭の子女が多かったように思う。きれいにお化粧をして、あまりあくせくアルバイトすることもなく、ブランド物のバッグを持っておしゃれとデートにうつつを抜かし、とくに必死で勉強もしない女子の間で、私は仲間を見つけられないでいた。男子は男子で、元二期校特有の「どうせ東大には入れなかった」という虚無感漂う中、サークル活動にうつつを抜かし、何事も七割くらいの力しか発揮せずにすり抜けて行こうという態度が、私はどうしても好きになれないでいた。あるいは、「必死で頑張る姿を他人には見せない」というのが都会的でスマートな外大生のカラーだったのかも知れない。けれど私はこのカラーにはまったくなじめず、退学して他の大学を受け直そうかと本気で考えるほどだった。

そんな中で何となく同じ不満を抱いているような先輩がいた。それが林さんだ。私の覚えている外大生の林さんは、いつも不機嫌だった。もちろん仲間ともうまくやっていたし、むしろあのキャラクターで人気者だったともいえるが、よく見ていると彼は、自分がくだらないと思う人間とは一切付き合わなかった。そして何よりフランス語ができた。もちろんわき目もふらず勉強しているようなそぶりは一切見せないのであるが、話すのは誰よりもうまかった。外大にはフランス語を母語とする学生や帰国子女も多くいたが、そんな人たちにも引けを取らないほど彼は学部生の頃からよくできた。遊んでばかりいる学生を尻目に、暇さえあればアルバイトに励んでいたのも、少しでもまとまったお金が貯まるとフランスに行くためだったのである。あの頃はまだ渡航に必ずビザが必要だった時代で、今ほど気軽にフランスに行ける時代ではなかった。彼は、彼一流のやり方で必死だったのだと思う。他人には明かさない自分の理想があって、その実現のためにはわき目もふらず、寸暇も惜しんで努力していたのだろう。私はといえば、現状に不満を抱くだけでそれほど努力もしていなかったのであるが、傍で見ていて彼のそんな様子は手に取るように分かった。そしてそんな姿から私は一つの答えをもらったような気がした。周囲の学生などどうでもよい、表面的な付き合いの友達なんかできなくてよい、自分のやりたいこと、やるべきだと思うことを思いっきり追求すればいいのだということを…。

それから林さんと私は急速に親しくなった。私は卒業後の進路をどうしようかと決めかねていたが、林さんに「あなたはブスなんだから、普通の就職は無理よ、大学院に進学し

なさい」と言われ、素直に納得し、大学院に進学しようと決心した。林さんからはいろいろなことを学んだ。学部の 3 年くらいの時にはすでに、彼はフランス語を使ったアルバイトをしていた。かっこいい仕事でスマートに儲けたいと思ったり、気楽な仕事でなるべく多く稼ぎたいと思ったりする学生が多い中で、彼はアルバイトの機会さえ研鑽の場ととらえて、自分のレベルアップに使っていたのだと思う。

林さんと私には一つだけ共通点がある。それは、フランス語検定の 1 級を持っていることだ。林さんも私も、長い留学に出る前に 1 級に合格した。ただ、林さんは 1 級合格時に奨励賞ももらっている。私は林さんという先達がいたからこそ自分も 1 級合格を目指したのであるが、林さんは合格した私に「あら、受かるのは当たり前だけど、奨励賞も取れなかったの？」と彼一流の毒舌でお祝いを言ってくれた。彼から見ると私は、不細工で愚図な妹、といった存在だったのだろう。ともあれどこか私を認めてくれている部分も感じられ、アルバイトを回してもらったり、二人で話題の映画を見に行ったり、今思えばずいぶんと贅沢な時間を過ごしていたように思う。

さて、外大生は総じて、「口ばかり達者で、中身が空っぽ」、あるいは、「言葉はできるけれど、文学は分からない」と評される。実業界に進んだ仲間たちは、むしろその軽さをフットワークのよさとして、比較的生き生きと仕事に励んでいるのであるが、学問の世界に残った外大生は、それぞれ苦戦している。苦戦の理由の一つに、「語学はできるけれど研究はイマイチ」という外大生評があったのは否めないだろう。私は自分の道が定まるまでに大変な遠回りをし、未だにはっきりとした答えが見いだせないでいる。林さんもフランスに留学し、イナルコで教師を務めながらも、帰国してから定職につくまではかなり苦労した。いわれなきあの外大生評に苦しめられていたのは想像に難くない。なんとなく運がよくて早くに就職の決まった私は、林さんこそどこかの大学に場を得るべきだと思っていた。けれど、彼の自尊心を思うとそんな話をできるはずもなく、お互いの物理的な距離も相まって、その頃は何となく疎遠だった。そんな時に林さんが学会発表をした。私はその発表を聞いていないのであるが、その時に学会誌の編集委員をしていたある先生が、一面識もない林さんの発表を絶賛していた。林さんの就職が決まったのはそのすぐ後だったと記憶している。

人に弱みを見せるのが嫌いで、努力しているそぶりも見せなかった林さん。けれどさりげなく、採択された科研費申請の書類を見せてくれたり、何かの委員の時には私を指名してくれたり、何くれとなく先輩として見守ってくれていたことを今でも思い出す。私は、研究者としての林さんの実像を未だ知らない。こうして後に残されてしまった今となっては、Hさんが研究者として、何を考え、何を成していたのか、そして何を成そうとしていたのか、それを辿ってみることが私に与えられた課題であるように思う。きっと志半ばで遺されたものがあるのではないだろうか。どこまで後を辿ることができるか心もとなくはあるが、彼の書いたものを手掛かりに、これからゆっくりと考えて行きたいと考えている。

Hommage

Chers collègues, chers amis,

Je vous remercie de m'avoir donné la possibilité de rendre hommage à Osamu Hayashi.

Je dois l'amitié que j'ai pu nouer avec Osamu Hayashi au colloque *Orient(s) de Marguerite Dura*s, que j'ai organisé en 2009 à l'Université du Tohoku, en collaboration avec le Professeur Tsutomu Imai. Dès le printemps 2008, après quelques rencontres, lors de congrès ou de colloques, Osamu Hayashi me fit part de son souhait de participer au colloque de Sendai. Ce souhait s'expliquait par un intérêt marqué non seulement pour l'œuvre de Duras, mais aussi, plus généralement, pour les approches transversales et interculturelles que permet la littérature comparée.

La participation d'Osamu Hayashi à ce colloque ne se limita pas à une communication. Grâce à lui, nous pûmes bénéficier du témoignage du Professeur Tsutomu Iwasaki, puisqu'il connaissait bien ce spécialiste de Proust, de Valery Larbaud, également traducteur, de Marguerite Yourcenar en particulier. Ce témoignage, fruit d'une expérience originale, celle de la post-synchronisation d'*Hiroshima mon amour* à Paris, cette évocation du travail d'Alain Resnais, d'Emmanuelle Riva, d'Eiji Okada fut l'un des moments les plus émouvants de ce colloque. La préparation de ce témoignage, lu par Osamu Hayashi, mais également le travail d'édition de ce texte nous donnèrent, à Osamu et moi-même, l'occasion de mieux nous connaître. Plusieurs courriers suivirent le colloque.

Même à distance, nous restions unis par une même passion pour l'œuvre de Duras. Cette passion nous a donné la chance de nous revoir en août dernier, à l'occasion du colloque *Marguerite Duras, Passages, croisements, rencontres*, que je co-dirigeais au Centre culturel international de Cerisy-la-Salle. Osamu Hayashi devait intervenir en fin de colloque sur un sujet ambitieux, le moi durassien, « entre Lacan et Bouddha ». Pris par de nombreux projets, Osamu ne put malheureusement nous rejoindre que peu avant son intervention, mais les quelques jours passés ensemble dans ce château si riche de mémoire furent l'occasion de conversations qui ne laissaient pas de doutes sur la solidité de notre amitié.

Osamu Hayashi aura été un chercheur brillant. Ce n'est pas émettre un propos de convention que de le dire. Au lendemain de son décès j'ai reçu un courrier d'Eric Benoit, Professeur de littérature française à l'Université Bordeaux 3, que certains parmi vous connaissent. A l'émotion se mêlait l'admiration envers un collègue qu'Eric Benoit avait rencontré pour la première fois à Sendai, et qu'il avait retrouvé lors de colloques dans d'autres pays. Osamu bénéficiait assurément de la reconnaissance de la communauté des chercheurs en littérature française, en France mais aussi bien au-delà. Je me souviens d'avoir reçu de sa part un courrier le 12 mars 2011, en réponse au courrier inquiet que je lui avais envoyé. Il était alors en Colombie, à Bogota, où il intervenait dans le cadre d'un colloque sur Marguerite Yourcenar. Osamu s'interrogeait sur la possibilité, ou non, pour lui de revenir les jours suivants à Fukushima, se demandait s'il allait rejoindre sa famille dans le Kansai.

J’évoque ici ce courrier parce qu’en un sens il condense, malgré son contexte exceptionnel, la nature de notre relation, qui ne fut pas seulement une relation de travail. Et c’est précisément cela que je trouvais si remarquable. Certes, nos rencontres ne furent pas si nombreuses, mais elles n’avaient pas besoin de l’être pour que se manifestent une forme d’intimité, des confidences, une évidente relation de confiance, tant était sensible, dans sa conversation comme dans certains de ses courriers, sa spontanéité, sa sincérité. De ce fait même, la langue utilisée pour nos échanges n’avait nulle importance. Osamu était si français par son naturel que j’en arrivais à oublier son aisance : la langue utilisée lors de nos échanges n’avait plus la moindre importance, seuls importaient les impressions ou les sentiments dont il me faisait part. Je n’étais plus français alors, pas plus qu’il n’était japonais – amis nous étions, dans le seul sens que peut avoir ce mot.

Lors de notre dernière conversation à Cerisy, Osamu Hayashi fit preuve de la même curiosité – lui aussi aimait à demander « Pourquoi ? ». Nous parlâmes de ses expériences récentes, de son université, de Fukushima, de l’avenir. Je me souviens qu’il évoqua son âge, le temps qui passe. Non pas avec inquiétude, mais avec lucidité, et comme si celle-ci l’obligeait à encore plus d’humilité. Ce qu’il s’imposait, il s’estimait avoir le droit de l’attendre des autres, et par là avoir le droit de dire ce qu’il aimait, et ce qu’il aimait moins. Avec un peu de distance déjà, je vois qu’il se dégageait d’Osamu comme une éthique, à la fois personnelle et exemplaire. Mais, dans le fond, à quoi bon consacrer sa vie à la littérature, aux littératures, au croisement des cultures, si ce n’est pour en extraire comme un art de vivre ? Oui, Osamu Hayashi aura été un bon lecteur, oui de ses voyages il aura fait bon usage, et c’est à cela en lui qu’aujourd’hui je rends hommage.

Yann MEVEL
Université du Tohoku, Sendai

矛盾する人

大谷尚文

月曜昼食会

私が林修さんの存在を知ったのは、毎週月曜日に、東北大にフランス語の非常勤に通っていたときのことであります。同じ時間に阿部宏慈さんがおり、いっしょに川内のラーメン屋に昼食に行きはじめました。そこに梅木達郎先生が加わり、やがて林さんも加わって、私たちはこれを勝手に月曜昼食会と呼んでおりました。

皆さんご存じの御三人ですから、月曜昼食会は一気に研究上の最新情報の交換の場と化しました。私はたちまち傍観者のような立場になってしまいましたが、その傍観者の目で御三人のことをほれぼれと眺めておりました。仙台アリアンス・フランセーズにおられたルディナ・セヴラニさんが、福島大で非常勤をする前に、ご挨拶に林さんに会いに来られたのも、この月曜昼食会の際でした。林さんは水を得た魚のごとく、いささか前屈みになってフランス語をまくし立て、セヴラニさんが慎ましげに応対なさっていた様子が今でも眼に浮かんできます。

梅木さんが、林さんの論文の一節を学生の論文に引用させてほしいと、引用の許可を林さんに求めたのも、この月曜昼食会でした。いつもは感情を表にあらわさない林さんが、急にあわてたようになったので、印象深くそのシーンを覚えています。

ある日、林さんが阿部宏慈さんに訊ねました。

「<<Événement>>って、どう訳せばいいんですか？」

「『出来事』でいいんじゃないですか」

と阿部宏慈さんが答えます。

わきで聞いている私は、

「えッ！」

愕然としました。林さん、仏検の準 1 級とか 1 級とかの試験問題を作っているんじゃなかったっけか？

わが身の恥をさらすようですが、奥さんに逃げられたわが家の長男が、めでたく再婚することになりました。喜んでそんな話をしていると、わが家の事情を知っている林さん、

「また離婚しますね」

私は思わず林さんの首を絞めてやりました。

もう 10 年以上前のことです。

それもこれも、あの月曜昼食会でのことでした。つまり、月曜昼食会を通じて、主観的には大変気心の知れた仲になりました。

その結果、

（1）林さんが東京で国際ユルスナール学会を開催する際、主催者の人数が足りないので名前を貸してほしいと頼まれました。国際ユルスナール学会のポスターの主催者の欄には私の名前が入っているはずです。

（2）私が支部長をしていたとき、当時の支部代表幹事の山本先生の後釜を、「どう

せいつかはしなければならないのだから、今やってくれませんか」ということで、強引に林さんにお願いしました。林さんは一瞬、固まったようになりましたが、
「いいですよ」
　と引き受けてくれました。
（3）東北大のドゥニ・ドゥヴィエンヌ先生から頼まれてピエール・ガマラという小説家・詩人・評論家が書いた『ジョルジュ・サンド――自由な女』を、経緯の詳細は省きますが、林さんと共訳することになりました。ガマラさんはドゥヴィエンヌさんのおじい様です。しかし私自身、ジョルジュ・サンドのことは知らないし、ましてやガマラさんの著書の新しさがどこにあるかわからない。そこで、ドゥヴィエンヌさんに本書の意義を明らかにするような「序文」を頼みました。筆者がジョルジュ・サンドをあらためて発見し、愛するようになる「転向の物語」だとして本書を紹介するこの「序文」と、本編とからなる『ジョルジュ・サンド――自由な女』は、かなり充実した訳本になっているはずですが、残念ながら出版社が見つかっていません。

立ち去る人

　このような付き合いはありますが、林さんのことで真っ先に浮かんでくるのは、不思議なことに、別れのシーンです。東北大の非常勤講師室で、帰りの福島行きの列車にはまだ間があるから、お茶でも飲んでいくこともできるのに、
「それじゃあ」
　と、とっとと立ち去っていく、その後ろ姿です。
　どこでお会いしても、どこで食事を共にしても、もっとも印象に残っているのは、林さんの立ち去る姿です。
　最後にお会いしたのは、というよりも最後にお別れしたのは、東大の本郷で開催された学会の際でした。林さんといえば、ご存じのように、ファッションが大変に奇抜な方でしたが、そのときは股下 50 センチ、股上 1 メートルといったような凄いズボンをはいていました。このファッションをどう納得したらいいか迷っているうちに、
「じゃあ」
　と言って、いつものカートを引っ張って立ち去っていきました。私にとって、それが林先生の最後の姿でした。
　結局、私にとって、林さんは立ち去る人だったようです。立ち去って、どこに行ったのか、私にはわかりません。こういう印象は、身近にいた人にもあったのではないか。
　こうした予測は、佐野先生から頂戴したメールで確証されました。佐野先生はこう仰っています。失礼を顧みず、引用させて頂きます。
　「実は私は彼のことはほとんど知らないのです。接点はフランス語の授業を担当しているということだけ。研究はもちろん別、私生活での付き合いもまったくありませんでした。だからといって、仲が悪かったわけでもありません。」
　きっと、そうでありましょう。
　そして、林さんが立ち去っていったこのどことも知れぬところから、気負いもてらいもなく林さんが持ち帰ってくるのは、イナルコで先生をしていたという実績であり、

女子プロレスラーのサインの入ったＴシャツであり、国際学会での発表という業績、国際ユルスナール学会の主催者という肩書きであったりするのです。

孤独者にして愛される人

つまり、林さんはご自分の背後に、誰も触れることのできぬ世界を持っていた。私の林修像はこのようなイメージに究極するようです。そして、ピカソのサルタンバンクの背景にある空や砂漠を思わせる、この茫々としたものには、私自身、出会ったことがある。そう言ってみたい気がします。

私自身のつたない体験を述べさせて頂ければ、私は皆さんのような秀才と違って、30歳も過ぎてからフランス語の勉強をし直すために､はじめてフランスに渡りました。トゥールで生活してちょうど1年ぐらい経った頃じゃないかと思います。あまりに私事なのでお話しするもお恥ずかしい限りですが、街路を歩いていて、何の脈絡もなく、不意に、あ、「無限」l'infini というものが、どんなものかわかった！　そう確信したのです。突然の、頭蓋骨がきしむような衝撃でした（たんに脳の毛細血管が切れただけなのかもしれませんが）。「無限」とは途轍もなく巨大なもので、人間はそこから生まれ、やがてそこに帰って行く。日本的なモラルにがんじがらめになって、身動きもできなかったひとりの人間が、突如、自由を獲得した瞬間でした。

私が申し上げようとしていることは、もうおわかりと存じます。林さんは無限なるものの感覚を持っていた。そう私は言いたいのです。林さんはご自身がクリスチャンでなければ、文学を通じてこのような体験を蓄積していったのでしょう。私などの場合、無限と自己との関係はかなり希薄で、私の生き方を決定するには足りませんが、林さんにおいては十分に強力であって、それだけで自足していたようにさえ見えるのです。だから、林さんはこの世という「通りすがりの町」から、みずからの起源である無限なるものに立ち去って行っただけだ。そう言えるのかも知れません。

しかし、林さん、あなたがいかに無限なるものとのあいだに自足した関係を結んでいようと、あなたはやはりみんなに愛された人でした。それはとりもなおさず、林さんが愛する人だったからです。10年以上も前なのに、私は林さんにさんざん年寄り扱いをされました。私が健康のためにランニングでもしようかな、などとつぶやくと、「走っちゃダメです。散歩がいいですよ。膝を痛めますから」

真顔でこう言ってくれました。

私に見せてくれた、決して押しつけがましくない、このような心遣いは、誰に対しても見せていたのではないでしょうか。だから、林さんは愛され、その訃報に、私たちは衝撃を受け、深い悲しみを覚えるのです。

孤独者にして愛される人。林さんそのものであるこの矛盾に、私はとまどうばかりです。

（石巻専修大学教授）

編集後記

日本フランス語フランス文学会東北支部会誌第８号をお届け致します。今号の内容は、2014年11月15日に、福島大学の主催によって開催されました東北支部大会にもとづいております。査読を経て掲載されました二つの論文はいずれも大変興味深い内容となっており、今後ますますの研究発展が期待されます。

この支部大会の直前に林修氏が急逝されました。林氏は、当日、ご発表を予定されており、全く思いもよらぬできごとでした。支部大会では、３名の方の追悼文が披露され、本会誌でもこれを掲載することに致しました。

また、今号を出すまでに向井正利氏、藤井史郎氏、渋谷貞次郎氏の訃報が伝えられました。これまで支部の様々な活動に寄与してくださった方々に改めて感謝申し上げ、謹んで哀悼の意を表します。

会員のみなさま、このHP版をご覧下さったみなさまには、今後とも本誌へのご支援、ご協力を賜わりますよう、よろしくお願い申し上げます。（T.T.）

投稿規定

１．日本フランス語フランス文学会東北支部会員は，この雑誌に投稿することができる．他に，編集委員会が認めた場合は会員以外からの投稿も受理する場合がある．
２．投稿希望者は，原則として東北支部大会で口頭発表の後，これをもとにした原稿を投稿するものとする．ただし，編集委員会が認めた場合は研究発表を経ない原稿の投稿も受理する場合がある．
３．投稿希望者は，事前に支部事務局に連絡し，執筆要項を受領し，それに沿って原稿を作成する．
４．講演原稿，シンポジウム報告，書評など，論文以外の投稿も受け付ける．
５．使用言語は，日本語もしくはフランス語とする．
６．論文の分量は，本文，注を含めて日本語の場合は 16,000 字以内，フランス語の場合は，A4 版 15 枚（4,800 語）以内を原則とする．他のジャンルの分量については，編集委員会に事前に問い合わせられたい．
７．投稿原稿は，Microsoft Word 形式の添付ファイルで支部事務局に送る．締め切りは，支部大会の翌年の 1 月末とする．
８．原稿の採否，掲載時期は，査読を経て編集委員会が決定する．
９．雑誌は，日本フランス語フランス文学会東北支部会ホームページ上での刊行を原則とするが，適宜冊子体での刊行も行う．
１０．冊子体での刊行においては，原稿執筆者に本体 10 部，また抜き刷り 30 部を贈呈する．

（2010 年 11 月 13 日開催の支部総会にて一部改訂）

Nord-Est

Bulletin de la Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises du Tohoku, n° 8、

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第８号

編集責任者／辻野稔哉

編集委員／阿部宏，後藤尚人，森田直子，山本昭彦

２０１５年５月２０日発行

発行者／日本フランス語フランス文学会東北支部

http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/sjllf-tohoku/

支部事務局への問い合わせ等は，上記ホームページの「ご意見＆ご要望」ページをご利用ください。

フランス政府公式フランス文化・語学教育機関

仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ

Centre officiel de langue et de culture française
Association franco-japonaise - Alliance française de Sendai

フランス文化
Evénements culturels
Médiathèque

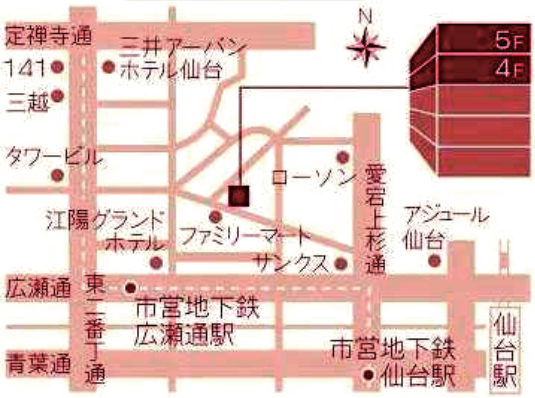
フランス語
Cours de français

法定翻訳・通訳
Traductions certifiées
Interprétariat

フランス語試験
DELF/DALF/TCF

様々なレベルに対応した安心・丁寧なフランス語講座、フランスを楽しめる文化イベント、各種翻訳・通訳やフランス語試験を≪東北のフランス≫として展開しています。各教育機関・団体等への講師派遣も承っております。
東北唯一のフランス政府公式機関アリアンス・フランセーズへおまかせください！

Venez découvrir la culture et la langue française dans la bonne humeur, quelque soit votre niveau !



〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町二丁目8-10-4F・5F
TEL：022-225-1475　FAX：022-225-1407
Mél: contact@alliancefrancaise-sendai:org
HP: http;//alliancefrancaise-sendai:org